

草津市幼保一体化検討委員会主な意見のまとめ（第5回の振り返り）

項目	内容
（3歳児からを含めた）連続的な保育・教育のあり方	0歳児から5歳児まで、どこから教育かというのは、生まれた時から1つの関わりの中で、いろいろなことを吸収してだんだん大人になっていくものであり、成長していくという意味では、生まれた時から教育は始まっている。
	3歳から5歳の縦割り保育において、成長に伴い、教えてもらい学ぶ、自分でやる時期、教えてあげて学ぶ時期と変化していく。2歳児は一人遊びが中心だが、3歳では、一緒に集まってお話をしたり、並行遊びとして、相手を認めるようになっていく。その上で、協調的にみんなで話し合っていると、ルールを守ってするという遊びができていくので、3歳というのは、本当に大事
	2歳から3歳までは、一人遊び、環境とのやり取りの中で生活を通して育ていく必要があるが、4歳、5歳になった時には、小学校との接続や集団への慣れを含め、自信や意欲を持っていくというモードに切り替えて、進歩しながら、学習意欲、挑戦して身に付けていく力を獲得していくことが大事
	一体化を検討する中で、3歳からの教育、保育という線引きではなく、未満児からの母子関係の充実した時間から、社会に出て行くといった変遷を全て1つの園で一体的にできる良さがある。
	2歳児、3歳児の子どもたちに対して何が一番大事か、4歳児、5歳児に対してはどう変わっていくのかということのをうまく整理し、一体型の園では何をしていくかを考えないといけない。
	公立幼稚園での3年保育を実施していただきたい。3歳は友達と一緒に遊びたい時期であり、同年齢の子と一緒に関わり、いろいろなことに興味をもつ時期であり、安心できる環境の場で子どもたちを遊ばせてやりたい。
	私の子どもでは、2年保育を受けた子より、3年保育を受けた子の方が集団に慣れるのが早かった。幼稚園での3歳児からの受け入れは良いことだと思う。
	3歳児と4歳児では発達が全然違う。3年保育となった場合は、発達、特色をしっかりと学んで進めていくことが大事。2年保育では、自立に向けて小学校に上がるまでには少し時間が足りない。一体化になった場合、3歳児からの教育で良いと思う。
1日のデイリープログラムのあり方	幼保を一体化し、同じ施設の中で長時部と短時部があった場合、その教育の進度や差を整理する必要がある。
	それぞれの園の特色があり、教育をメインとして考えている園は、午後の活動も重視しており、一概に午後は自由遊びとはいかない。
	子どもたちの時間的な配分について、子どもたちの生活にとって、この時間は教育でこの時間からは違うというようなことが子どもの発達を考えた上で、本当にそれが生活として分けられるか疑問もある。

項目	内容
多様な施設と保護者の選択	<p>家庭ではない集団生活での良い面がある中で、自分の子どもにとって、どんな生活、関わり、集団が良いかは、保護者が決めるべきである。そういう選択肢がたくさんあるというのは、いろいろな考えがある中では、良いと思う。</p> <p>一体化施設として、1日の過ごし方、どういう空間をつくるのか、年齢によっても違うし、全部同じでなくても良い。こども園によって個性があっても良いのではないかと思う。例えば、はぐくみ育てることを重視していく園や、いろいろなものを身に付け、獲得していくような教育を授けていくことにシフトしていく園もあって、子ども園の範囲の中で、幅と個性があって、それぞれが理念として打ち出された中で、保護者が選択して、利用していけるものであろう。</p>
幼児教育の内容	<p>教育のあり方について、公立幼稚園がやっているレベルと同等の教育を保育所でも受けられる方が良いかと思う。</p> <p>小学校に入ったときにスムーズに授業についていけるように、最低限の読み書きや、例えば楽器の演奏、合奏など、少し難しいことを練習していくなどの教育をした方が良いと思う。</p> <p>公立幼稚園では、直接、読み書きは教えておらず、環境の中で、「あいうえお」の表を張ったりして、子どもが興味を持ったときに、尋ねてきたら教えるといった指導をしている。</p> <p>今の幼児教育では、子ども自らが環境に働きかけていくものとされている。働きかけることによって、例えば、遊びを通して、また、お店屋さんごっこで必要だから文字や数字を獲得するという教育が、公立などでは主に行われていると理解している。</p>
課外授業	<p>一体化した場合に、公文、英語や空手など、稽古ごとのようなものへの対応が可能かといったこともある。</p> <p>保育園に行っている子どもはなかなか塾などに行かせることができないので、課外授業を希望する声もある。</p> <p>塾的なことの導入にしても、個人の希望で保育所の中で外部の講習をして、それを受ける子と受けない子がいることが本当に良いのか、じっくりと考えなければならない。</p> <p>保護者の中にはそういう希望を出してこられる方もあるし、その意見は目立つ側面もあるが、いろいろな習い事をするのが幼児期の教育としてふさわしいかといえば、そうは思わない。むしろ、子どもたちの純粋な生活の中で行われる遊びという営みの中に、本来の幼児期にしかできない学びがあるということを推奨している。</p>

項目	内 容
特別支援教育のあり方	障害児の受入れについて、長時部と短時部のどちらで対応していく方がふさわしいか、また職員の配置体制等について、考える必要がある。
親の連携	地域の子どもは、保護者なり先生がリードしていけば友達になる。でも、親同士というのは、なかなかそういう意味ではつながっていけない。そういった場をどうやって地域の中で確保していくか。
	地域ごとの親の連携は大事。その地域で親がしっかりとスクラムを組み、子どもたちは、私たちこの地域の親が助けるといのか育てるのだとか、そんな意識づくりなどは大きなポイントではないか。
求められる子育て支援、家庭支援機能のあり方	自分の保育経験からすると、集団にスムーズに入れる子は、母親に甘えることができた子である。そういった子どもへの接し方などを勉強していける機会があれば良い。
	市が実施している母親学級があって本当に良かった。しかし、積極的に行けない方もいると思うので、もう少し周知してほしい。
	子どもの成長を支える上で、家庭・保育所・幼稚園が十分継続して連携していくことが必要。保護者と連携を密にしていかなければならない。
幼・保・小の連携、小学校との連携	幼稚園の子が保育園に行ったり、保育園の子が幼稚園に行ったりしている。小学校の子が幼稚園に行ったり保育園に行ったりして交流をして深めて、地域のつながりみたいな感じになっている。
	5歳児と小学5年生が交流する「5・5交流」が良かったという保護者の声を聞く。保育所や幼稚園サイドから、小学校に対する交流実施の提案があれば、小学校も教育課程を考えて、交流していけると思う。